

大学生の過敏型自己愛傾向の変容

神谷 真由美

Transformation concerning hypervigilant narcissism in university students

Mayumi KOYA

【要旨】本研究の目的は、大学生の過敏型自己愛傾向の変容について、質問紙を用いた縦断調査により実態を明らかにし（研究1）、面接調査により過敏型自己愛傾向の改善のための要因を探索的に検討すること（研究2）である。研究1では大学生を対象に半年の間隔をあげ、自己愛的脆弱性尺度短縮版（以下NVS短縮版；上地・宮下，2009）を用いて過敏型自己愛傾向を2回測定した（Time 1, Time 2）。回答に不備がなかった大学生272名を分析対象とし、2回の過敏型自己愛傾向を比較した。その結果、有意差が認められたのはNVS短縮版の4下位尺度のうち自己緩和不全と潜在的特権意識、またNVS短縮版総得点であり、いずれもTime 1に比べてTime 2の得点が有意に高かった。研究2では、過敏型自己愛傾向に改善がみられた大学生11名を対象に、半構造化面接を実施し、改善の要因を尋ねた。その結果、調査対象者から『対人関係』、『学業』、『大学生活』、『その他』の要因が挙げられた。特に『対人関係』、『学業』は、大学生の過敏型自己愛傾向の改善に大きく影響する要因と考えられる。

【キーワード】大学生、過敏型自己愛傾向、自己愛的脆弱性

問題

青年期は、最も自己愛が高まる時期と言われる（小塩，2004）。それは、両親からの精神的離脱のプロセスにある青年期は自我が弱体化して脆弱となり、その防衛として自己愛が高まるためである（原田，2012）。小此木（1981，1999）によると、このような自己愛の高まりは、前期・中期青年期では自己の過大評価、傲慢な態度や権威への反抗といった形をとるが、やがて自分を越えた理想像への同一化、自我理想、アイデンティティといった開かれ、社会化された自己愛へと発展する。非臨床群の青年から成人を対象とした横断的調査では、自己愛傾向は高校2、3年生頃にピークを迎え（中山，2007）、成人期以降は低下することが示されている（Foster, Campbell, & Twenge, 2003; 原田，2012; 目久田・百瀬・越中，2017）。以上から、青年期特有の自己愛の高まりは、青年の自立や発達の促進に重要な役割を持つ。しか

し、一方では自己愛の高まりから、周囲の反応に敏感で傷つきやすく、様々な症状や不適応を引き起こす青年もいる。近年、大学では抑うつ状態や引きこもり、暴力など困難な問題を抱える大学生が増加しており（齋藤，2006; 苦米地，2006）、これらの問題の根底には、自己愛の歪みや傷つきがあると言われる（川崎，2011）。そのため、自己愛の視点から、大学生を心理学的に理解する必要があるだろう。

自己愛研究においては、近年、対人的スタイルの特徴により自己愛傾向を2類型に分けて捉える視点が一般化している。2類型とは、自己顕示的で他者の反応に鈍感な誇大型自己愛傾向と、他者の反応に敏感で注目されるのを避ける過敏型自己愛傾向である。この2類型は、当初は自己愛性パーソナリティ障害を記述する際に用いられていたが、現在では非臨床群の自己愛傾向の研究（例えば、相澤，2002; Hibbard, 1992; 中山，2007; 中山・中谷，2006; Wink, 1991）にも当て

はめられる(神谷・上地・岡本, 2012)。しかし日本では、文化的な特徴から、恥や自己抑制への許容度が高く、過敏型自己愛傾向が問題となりやすいと言われている(Ronningstam, 2005)。自己愛性パーソナリティ障害の症例も、誇大性よりも、自己評価の低さ、抑うつ感、引きこもりといった形をとりやすく(福井, 1998)、過敏型自己愛傾向の事例が多いと考えられる。また、非臨床群を対象とした先行研究においても、過敏型自己愛傾向は、精神的健康の低さや不適応的な認知(清水・岡村, 2010; 清水・川邊・海塚, 2008)、不安やうつ傾向(上地・宮下, 2005)など、不適応の指標と関連することが示されている。以上から日本では、自己愛傾向の2種類のうち、特に過敏型自己愛傾向に着目することは臨床的に意義があると考えられる。過敏型自己愛傾向を測定する尺度はいくつかみられるが、その内容は、様々な特徴が含まれる過敏型自己愛傾向を包括的に捉えていたり(Hendin & Cheek, 1997; 中山・中谷, 2006; 高橋, 1998)、対人恐怖に関する尺度やモデルを参考に作成している(相澤, 2002; 谷, 2004)。そのため、過敏型自己愛傾向の諸側面を測定しているとは言い難い。過敏型自己愛傾向の諸側面を検討する尺度に、上地・宮下(2009)の自己愛的脆弱性尺度(Narcissistic Vulnerability Scale)短縮版(以下、NVS短縮版)がある。この尺度は、過敏型自己愛傾向のモデルを提唱したKohut(1971 水野・笠原監訳 1994, 1977 本城・笠原監訳 1995, 1984 本城・笠原監訳 1995)の理論に基づき、4つの下位尺度から構成される。下位尺度の内容は、①自己顕示抑制(自己顕示を恥ずかしいものと感じて抑制する傾向)、②自己緩和不全(不安や抑うつを自分で緩和する力の弱さ)、③潜在的特権意識(自分への特別の配慮を求める傾向)、④承認・賞賛過敏性(周囲からの承認・賞賛に対する過敏さ)である。

以上の先行研究から、非臨床群において自己愛傾向は青年期にピークを迎え、成人期以降は低下していくことが示されている。これより、一般的な生活の中に多かれ少なかれ自己愛の歪みを是正するような経験があると示唆される(目久田他, 2017)。しかし、一般的な生活のなかのどのような経験が、ピークを迎えた青年の過敏型自己愛傾向を低下させるきっかけとなるのだろうか。大学生が自らの過敏型自己愛傾向の問題をどのように克服していくのかという縦断研究は、国内においては臨床群を対象とした事例研究(例えば、吉井, 2007)にとどまる。国外では非臨床群を対象

に大規模な縦断研究(Wink, 1992)もみられるが、過敏型自己愛傾向の変容の要因については実証的に明らかにされていない。そのため大学生を対象に過敏型自己愛傾向の変容と、その要因について検討する必要がある。そこで本研究の目的は、大学生の過敏型自己愛傾向の変容について、質問紙を用いた縦断調査により実態を調査し(研究1)、面接調査により過敏型自己愛傾向の改善のための要因を探索的に検討すること(研究2)である。

研究1

目的

質問紙を用いた縦断調査により、大学生の過敏型自己愛傾向の変容の実態を明らかにする。

方法

(1) 調査手続き 2回の質問紙調査を行った。1回目の質問紙調査(Time 1)は、大学生を対象に集団調査を行った。質問紙配布後に、質問紙への回答は任意であること、回答を途中でやめてもよいこと、本研究に不参加でも教育を受ける上での不利益はないことを説明し、その場で回答を依頼した。質問紙への回答をもって対象者の同意を得たものとした。また、本研究の主旨を説明し、2回目の質問紙調査(Time 2)に協力いただける場合には、質問紙郵送のため氏名・住所の記入を依頼した。半年後に、郵送法により2回目の質問紙調査(Time 2)を実施した。

(2) 調査対象者 2回の質問紙調査に不備なく回答が認められたのは、大学生272名(男性163名、女性109名)であった。Time 2時点での平均年齢は19.40歳、標準偏差は1.01歳であった。

(3) 調査内容 Time 1では、以下の項目について調査した。①過敏型自己愛傾向:NVS短縮版(上地・宮下, 2009)を使用した。本尺度は、「自己顕示抑制」「自己緩和不全」「潜在的特権意識」「承認・賞賛過敏性」の4下位尺度から構成される。回答は5段階評定で、得点が高いほどその傾向が強いことを示す。②フェイス項目:性別、年齢、学年、Time 2の回答と照合するために学籍番号を尋ねた。③Time 2への協力依頼:本研究の主旨を説明し、Time 2に協力いただける場合には、質問紙郵送のための氏名と住所の記入を依頼した。

Time 2では、以下の項目について調査した。①過敏型自己愛傾向:Time 1と同様、NVS短縮版(上地・

宮下, 2009) を使用した。②フェイス項目: 性別, 年齢, 学年, Time 1 の回答と照合するために学籍番号を尋ねた。③研究2への協力依頼: 本研究の主旨を説明し, 研究2に協力していただける場合には, メールアドレスの記入を依頼した。

結果と考察

2回の質問紙調査 (Time 1, Time 2) の過敏型自己愛傾向の平均値, 標準偏差をTable 1に示した。また, NVS短縮版の各下位尺度得点, 総得点について, Time 2の得点からTime 1の得点を引いた得点を変化量として算出した。各変化量の平均値 (標準偏差) は, 自己顕示抑制変化量は -0.39 (3.28), 自己緩和不全変化量は0.66 (4.37), 潜在的特権意識は6.22 (3.61), 承認・賞賛過敏性は0.00 (3.56), NVS総得点変化量は6.50 (8.77) であった。

過敏型自己愛傾向の変容を検討するため, 2回の質問紙調査におけるNVS短縮版の得点に対し, 対応のある *t* 検定を行った。その結果, 自己緩和不全, 潜在的特権意識, NVS総得点は, Time 2の得点がTime 1の得点よりも有意に高かった (順に, $t(271) = 2.48, 28.42, 12.22, p < .05, .01, .01$)。自己顕示抑制は, Time 2の得点がTime 1の得点よりも低い傾向がみられた ($t(271) = 1.96, p < .10$)。承認・賞賛過敏性は, 有意差が認められなかった ($t(271) = 0.02, n.s.$)。以上から大学生の過敏型自己愛傾向は, 半年間の期間では, 自己顕示抑制, 承認・賞賛過敏性を除き, 全体として増加が認められた。

小学生から大学生までを対象に自己愛傾向の発達の変化を横断的に調査した研究 (中山, 2007) では, 過敏型自己愛傾向のピークは高校2, 3年生であり, 大学生は高校2, 3年生より得点が低かった。また原田 (2012) では, 大学生・大学院生と26~35歳の成人の自己愛傾向を比較し, 大学生・大学院生の自己愛

傾向が高いことを示している。つまり, 自己愛傾向は高校2, 3年生でピークを迎えるが, 大学生の間は高く, 成人期に入るにつれ低くなると考えられる。ただし, これらの先行研究では大学生の学年について検討されていない。鶴田 (2010) によると, 大学1年生の1年間は新しい環境に適応する時期, 2~3年生は自分らしさを探求する時期, 4年生の卒業前1年間は将来の準備をする時期である。大学生といっても, 学年により置かれている状況が異なり, 心理状態への影響が考えられる。本研究の対象者の平均年齢は19.40歳, 標準偏差は1.01歳であり, 多くが大学1, 2年生であった。そのため多くの対象者が自分らしさの探求といった青年期的テーマに取り組み始めたり, また取り組んでいる最中と考えられる。青年期の自己愛の高まりは, 親からの精神的自立やアイデンティティ形成といった青年期的テーマと密接に関連していると考えられ, それにより半年の間に全体として過敏型自己愛傾向が高まったと推察される。今後は, 学年ごとに比較検討を行う必要がある。

研究2

目的

過敏型自己愛傾向に改善がみられた大学生を対象に, 面接調査を実施し, 過敏型自己愛傾向の改善のための要因を探索的に検討する。

方法

(1) 調査手続き

1~2時間の半構造化面接を行った。調査対象者には, 面接開始前に面接承諾書に署名を求め, 録音や結果の公表についての同意を得た。

(2) 調査対象者

過敏型自己愛傾向に改善がみられた大学生11名 (男性3名, 女性8名), 平均年齢19.91歳, 標準偏差

Table 1
過敏型自己愛傾向の平均値, 標準偏差

	Time 1		Time 2		<i>t</i> (271)
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	
自己顕示抑制	16.99	4.38	16.60	4.01	1.96 [†]
自己緩和不全	14.13	5.00	14.79	5.14	2.48*
潜在的特権意識	6.65	1.56	12.87	3.61	28.42**
承認・賞賛過敏性	15.07	4.69	15.07	4.40	0.02
NVS総得点	52.84	10.89	59.33	12.31	12.22**

** $p < .01$, * $p < .05$, [†] $p < .10$

0.79歳であった。過敏型自己愛傾向の改善の基準は、NVS総得点変化量が、-5点以下であることとした。Time 2の質問紙で面接調査依頼に応じ、連絡先を記入した大学生のうち該当する大学生に個別連絡をとり、協力が得られた大学生を対象とした。11名のNVS総得点変化量の平均値は-11.64点であり、範囲は-30点～-5点であった。対象者の過敏型自己愛傾向の変化量をTable 2に示した。

(3) 調査内容

調査対象者に過敏型自己愛傾向の諸側面と半年間での得点の低下について説明し、①過敏型自己愛傾向の改善に関して思い当たるエピソードとエピソードの詳細、エピソード前後での心理的变化、②思い当たるエピソードがない場合は、Time 1からの生活状況や心理的变化、③Time 1以前の過敏型自己愛傾向と関連する特徴について尋ねた。なお、本研究は信州大学のヒトを対象とした研究に関する倫理委員会から承認を得た。

(4) 分析方法

以下の手順で行った。①録音記録をもとに逐語記録を作成した。②逐語記録から、過敏型自己愛傾向の改善に関連する部分の語りを抽出した。③類似する語りをまとめ、下位カテゴリ、上位カテゴリを作成した。その際、必要に応じて調査対象者の語り、逐語記録、他の対象者の語りと照合しながら行った。

結果と考察

分析の結果、過敏型自己愛傾向の改善要因として、上位カテゴリが4個、下位カテゴリが10個得られた(Table 3)。以下の文中では、上位カテゴリを『』、

下位カテゴリを〈〉、対象者の語りを「」で示す。

『対人関係』は、〈親しい人間関係ができる〉〈人間関係を割切る〉〈多様性を受け入れる〉〈必要とされる〉〈親と距離をとる〉の5つの下位カテゴリから構成された。また、11名の調査対象者全員が『対人関係』を挙げており、過敏型自己愛傾向改善に大きく影響する要因と考えられる。〈親しい人間関係ができる〉では、「仲が良くなった(G)」「何でも話す気がします(J)」など、Time 1時点より、大学の同級生と親しくなったことが自身の過敏型自己愛傾向の改善の理由として挙げられた。この下位カテゴリを挙げた対象者は6名と最も多く、過敏型自己愛傾向の改善に大きい影響を与えていると考えられる。Kohut (1971 水野他監訳 1994, 1977 本城他監訳 1995, 1984 本城他監訳 1995)によると、個人は生涯、自己対象体験という自己を支えるために必要な体験を必要としている。自己対象体験には、自分自身が表出した行動や感情を映し返してもらうことで自己が承認される鏡映自己対象体験、理想化した対象と融合することで安心感がもたらされる理想化自己対象体験、自己と対象の間に類似性や共通性を感じる双子自己対象体験がある。これらの体験を重ねることで、自己愛は成熟した形に発達するという。親しくなった同級生と「似てて、気が合う(J)」、「肯定的に受け止めてくれる(J)」といった関わりが、双子自己対象体験や鏡映自己対象体験となり、過敏型自己愛傾向が改善したと考えられる。〈人間関係を割切る〉では、Time 1時点では「いろんな人と付き合わなきゃ(B)」というように、無理をして他者と親しくするよう努めていた。しかしTime 2時

Table 2
対象者の過敏型自己愛傾向の変化量

対象者	性別	学年 年齢	過敏型自己愛傾向の変化量 (Timeの1得点, Time 2の得点)					NVS総得点
			自己顕示抑制	自己緩和不全	潜在的特権意識	承認・賞賛過敏性		
A	女	2 20	-2 (13, 11)	-2 (23, 21)	-3 (20, 17)	-6 (25, 19)	-13 (81, 68)	
B	女	2 19	-5 (20, 15)	-1 (10, 9)	0 (9, 9)	0 (10, 10)	-6 (49, 43)	
C	女	3 21	-6 (24, 18)	-11 (22, 11)	-10 (25, 15)	-3 (18, 15)	-30 (89, 59)	
D	女	2 21	-5 (13, 8)	2 (5, 7)	-4 (11, 7)	1 (8, 9)	-6 (37, 31)	
E	女	3 20	1 (22, 23)	-4 (22, 18)	-2 (12, 10)	0 (19, 19)	-5 (75, 70)	
F	女	2 21	-2 (14, 12)	0 (13, 13)	-2 (16, 14)	-1 (21, 20)	-5 (64, 59)	
G	男	2 20	-11 (23, 12)	-5 (22, 17)	0 (13, 13)	0 (15, 15)	-16 (73, 57)	
H	男	2 19	-3 (17, 14)	-2 (10, 8)	-1 (6, 5)	-1 (6, 5)	-7 (39, 32)	
I	男	1 20	-1 (17, 16)	-3 (15, 12)	-7 (14, 7)	2 (11, 13)	-9 (57, 48)	
J	女	1 19	-4 (23, 19)	0 (11, 11)	-2 (15, 13)	-2 (12, 10)	-8 (61, 53)	
K	女	1 19	-4 (19, 15)	0 (16, 16)	-8 (23, 15)	-11 (25, 14)	-23 (83, 60)	

注1) 学年, 年齢はTime 2時点のものである。

大学生の過敏型自己愛傾向の変容

Table 3
過敏型自己愛傾向改善の要因

上位 カテゴリ	下位カテゴリ (対象者)	語りの例 (対象者) 〔 〕内は著者が補足
対人関係	親しい人間関係ができる (A, B, C, G, J, K)	〔Time 1時〕は学科とかだと、あんまり強く所属してるグループがないので。どちらかというといろんな所に顔出したりとか、真ん中にいたりすることが多いので、それも影響したかもしれないですけど、今は、学科の方もやっぱり仲が良くなった。(G) 〔友達と〕家族の構成がちょっと似てて、気が合うっていうのが一番。わりとズボラだったりとか。友達もあんまり悪口言わない。そういうのも安心して話せる。肯定的に受け止めてくれるから。ちゃんと良くないときは良くないって。こういうのがあったとか愚痴も言えるし、楽しかったことも言えるし、朝みた夢の話とかもするし。本当に何でも話す気がします。(J)
	人間関係を割切る (B, C, E, F, H)	1年生の時ほど〔同級生同士の関係が〕濃密ではなくなったので、その分楽になったというか。いろんな人と付き合わなきゃっていう想いはなくなったので。交友範囲が、この人達と付き合いばいいんだって範囲が決まったんで。満足ですね。(B) 最初はたぶん学科の人と、弓道部の人じゃなくて、学科の人と仲良かったんですけど。やっぱりだんだん雰囲気になれないんで。授業と実習以外はほとんど関わらないっていうか。まあ別にいいかなって。(H)
	多様性を受け入れる (A, D, E, I, J)	自分と相手をまったく別だと考えるようになったのかもしれないです。限られた人ですけど、いろんな人と関わって、こういう性格の人もあるんだなみたいなのが、学んできたというか。(I) 前よりもっと、こういう人がいるんだって。わりといろんな人を肯定的にみるようになった。前は、何なんだろうこの人とかって思うことがけっこうあって。ありえんな、こんな人とは付き合えない。そういうのがよくあったんですけど、最近は、あーこういう人もいるんだ、こういう人はこういう人なんだって思うようになった。(J)
	必要とされる (A, G, H)	〔サークルの責任者を〕やってくれて助かったよとか言ってもらえると、役に立てたんだって。すごいそれも嬉しいなと思って。でもやっぱり、必要とされてるって風に思えたのが一番大きくなって思って。(A) 重要なこと任されるようになったんで。合宿とかあったら班ごとに分かれるんですけど、その班長任されたり。自分の意見をなるべく言うようには。周りの意見をまとめられるように。(H)
	親と距離をとる (F, G)	あんまり連絡とらないので。親と。たぶんどんな内容であれ、親と話したことってけっこう影響してると思うんですけど、親の発言が影響する機会っていうのが減ったから、その分、気にしなくなったかなって。(F) 2年生の時〔Time 2時点〕だと、大会前でけっこう土日とかも遅いですよね。帰りが。あんまり〔親と同居中の祖父母の喧嘩〕現場に居合わせなかったっていうのがあるのかもしれないですね。(G)
学業	学業への 自信・面白さの発見 (G, I, K)	普通にみんな解いてできるでしょってやつが、できてなかったりしたことがあったので。〔Time 2時点での〕授業がおもしろかった。難しい所はあったんですけど、おもしろいって感じる面もあったので。意外とよくできてたりしたので、けっこう自信もついてきた。それが大きいと思いますね。(G) プレゼン発表の授業があって、そこで発表したことがけっこう周りからよかったよ、みたいな感じのこと言われて、それで人前でいろいろ話しても大丈夫なような自信がついたかなっていうのはあります。(K)
	課題が具体的になる (C, E)	3年になって〔Time 2時点〕から忙しくなってきて、忙しいほど頑張るタイプっていうか。忙しいとあれもこれも逆にできる気がするタイプなんです。で、2年の冬〔Time 1時点〕の方が余裕があったから、余裕があった時の方が自分についてグチャグチャ考えたりするんで。(C)
	意見の対立が増える (F)	別に、私の意見が通らなくてもしょうがないっていう機会が増えたから。自分の意見をしっかり持った人と話す機会が増えて、自分の意見が通らなくても普通っていうのが分かってきた。(F)
大学生生活	大学生生活への慣れ (I, K)	一番大きいのは環境に慣れたっていうのが一番大きいと思うんですよ。最初〔Time 1時点〕だと、本当に全く知らない環境にポツンと置かれて右も左も分からない状況に置かれて。後期〔Time 2時点〕になったらすると、わりと慣れてきて、今までの自分の行動に余裕が少し見え始めてきて、自分を落ち着かせることができるようになったのかな。(I)
その他	その他 (B, D)	この期間〔Time 1時点〕に風邪ひいたのが多かったかな。私、咳がひどい風邪が多くて。バイトが忙しくて、なかなかゆっくりできなかったっていうのはありました。(D) たぶんバイト関係だと思うんですよ。あんまり冬〔Time 1時点〕はうまくいってなかったんで、やめようかなって悩んだりしてんで、たぶんそれが出たんだと思います。その後実際辞めたんですけど。(B)

点では、他者と関わらない対人関係のあり方について、「満足ですね (B)」や「別にいいかなって (H)」というように自身で受け入れていることが挙げられた。〈多様性を受け入れる〉は、大学生生活やアルバイトなどで様々な他者と関わるなかで、自分とは異なる多様な考え方や性格があるということに気づき、受け入れていることが挙げられた。〈必要とされる〉は、部活やサークルなどで責任のある立場を任されるなど、周囲から必要とされた体験が挙げられた。〈親と距離をとる〉は、親との関わりが減少したことで、親からの影響を受ける機会が減ったことが挙げられた。原田 (2012) によると青年期の自己愛の高まりは、親からの精神的離脱のプロセスと関連しており、親と距離をとることで、親からの精神的自立が進み、過敏型自己愛傾向の改善のきっかけとなったと考えられる。

『学業』は、〈学業への自信・面白さの発見〉〈課題が具体的になる〉〈意見の対立が増える〉から構成された。調査対象者のうち6名が『学業』を挙げており、過敏型自己愛傾向の改善に大きな影響を与える要因と考えられる。〈学業への自信・面白さの発見〉は、大学の授業に対して面白さを感じたり、勉強や発表に対する自信がついたことが挙げられた。〈課題が具体的になる〉は、Time 1時点では進路や卒業研究が不明確な状態であったが、Time 2時点ではある程度明確になってきたことが挙げられた。この下位カテゴリがみられたC、Eはどちらも3年生であり、進路や卒業研究の方向性を定めたことが心理的安定につながり、過敏型自己愛傾向の改善のきっかけとなったと考えられる。〈意見の対立が増える〉は、授業で意見が対立する機会が増えたことが挙げられた。

『大学生活』は、〈大学生活への慣れ〉から構成された。この下位カテゴリがみられたI、Kは大学1年生であった。Time 1時点では新生活に対する不安が強かったが、半年経過し、大学生活に慣れたことが改善の要因となったと考えられる。対象者のうち1年生はI、J、Kの3名であり、そのうち2名が『大学生活』を改善の要因に挙げている。1年生にとって大学生活に慣れることは、過敏型自己愛傾向の改善に大きく影響すると考えられる。

『その他』は、体調の改善やアルバイトに関する内容であった。対象者自らが過敏型自己愛傾向の改善要因として挙げたが、これらの内容がどのように改善と関係しているかについては詳しく語られなかった。

総合考察

本研究の目的は、大学生の過敏型自己愛傾向の変容について実態を調査し、また過敏型自己愛傾向の改善のための要因を探索的に検討することであった。研究1では2回の質問紙調査を行い、大学生の半年間の過敏型自己愛傾向の変容を調べた結果、NVS短縮版の下位尺度のうち自己緩和不全、潜在的特権意識、NVS総得点において増加が認められた。本研究の対象者の多くが大学1、2年生であったため、多くの対象者が自分らしさの探求といった青年期のテーマに取り組み始めたり、また取り組んでいる最中と考えられる。青年期の自己愛の高まりは、親からの精神的自立やアイデンティティ形成といった青年期のテーマと密接に関連していると考えられる。そのため、半年の間に過敏型自己愛傾向が高まったと推察される。

研究2では、過敏型自己愛傾向に改善がみられた大学生11名を対象に、半構造化面接により、改善の要因を尋ねた。その結果、対象者から『対人関係』、『学業』、『大学生活』、『その他』の要因が挙げられた。そのなかでも『対人関係』はすべての対象者が改善の理由として挙げており、重要な要因と考えられる。そのなかでも〈親しい人間関係ができる〉は6名が挙げている。親しい同級生との関わりが、Kohut (1971 水野他監訳 1994, 1977 本城他監訳 1995, 1984 本城他監訳 1995) のいう自己対象体験となり、過敏型自己愛傾向が改善したと考えられる。また大学生の場合は、対人関係だけでなく学業に関する経験や、特に1年生においては大学生活に慣れることも過敏型自己愛傾向の改善の要因になるとが明らかになった。今後は、質問紙調査で実証的に検討することが必要である。また、研究1、2とも、学年の影響が推測された。そのため、今後は大学生の学年も踏まえ、より詳細に検討していく必要がある。

引用文献

- 相澤 直樹(2002). 自己愛的人格における誇大特性と過敏特性. *教育心理学研究*, 50, 215-224.
- Foster, J. D., Campbell, W. K., & Twenge, J. M. (2003). Individual differences in narcissism: Inflated self-views across the lifespan and around the world. *Journal of Research in Personality*, 37, 469-486.
- 福井 敏(1998). 誇大的な自己——自己愛性障害——. *こころの科学*, 82, 75-80.

- 原田 新(2012). 発達の移行における自己愛と自我同一性との関連の変化 発達心理学研究, 23, 95-104.
- Hendin, H. M. , & Cheek, J. M. (1997). Assessing hypersensitive narcissism: A reexamination of Murray' s narcissism scale. *Journal of Research in Personality*, 31, 588-599.
- Hibbard, S. (1992). Narcissism, shame, masochism, and object relation: An exploratory correlational study. *Psychoanalytic Psychology*, 9, 489-508.
- 上地 雄一郎・宮下 一博(2005). コフォートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成 パーソナリティ研究, 14, 80-91.
- 上地 雄一郎・宮下 一博(2009). 対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆弱性, 自己不一致, 自尊感情の関連性 パーソナリティ研究, 17, 280-291.
- 川崎 直樹(2011). 自己愛の心理学的研究の歴史 小塩真司・川崎 直樹(編) 自己愛の心理学——概念・測定・パーソナリティ・対人関係—— (pp. 2-21) 金子書房
- Kohut, H. (1971). *The analysis of the self*. New York: International Universities Press.
(コフォート, H. 水野 信義・笠原 嘉(監訳)(1994). 自己の分析 みすず書房)
- Kohut, H. (1977). *The restoration of the self*. New York: International Universities Press.
(コフォート, H. 本城 秀次・笠原 嘉(監訳)(1995). 自己の修復 みすず書房)
- Kohut, H. (1984). *How does analysis cure?* Chicago: The University of Chicago Press.
(コフォート, H. 本城 秀次・笠原 嘉(監訳)(1995). 自己の治癒 みすず書房)
- 神谷 真由美・上地 雄一郎・岡本 祐子(2012). 大学生の自己愛的甘えと誇大型・過敏型自己愛傾向との関連 広島大学心理学研究, 12, 127-136.
- 目久田 純一・百瀬 ちどり・越中 康治(2017). 成人期以降の自己愛的脆弱性の発達の变化——高齢者と大学生の比較に基づく考察—— 梅花女子大学心理こども学部紀要, 7, 10-18.
- 中山 留美子(2007). 児童期後期・青年期における自己価値・自己評価を維持する機能の形成過程——自己愛における評価過敏性, 誇大性の関連の変化から—— パーソナリティ研究, 15, 195-204.
- 中山 留美子・中谷 素之(2006). 青年期における自己愛の構造と発達の变化の検討 教育心理学研究, 54, 188-198.
- 小此木 啓吾(1981). 自己愛人間 朝日出版社
- 小此木 啓吾(1999). 精神分析から見た思春期心性 思春期青年期精神医学, 9, 131-144.
- 小塩 真司(2004). 自己愛の青年心理学 ナカニシヤ出版
- Ronningstam, E. F. (2005). *Identify and understanding the narcissistic personality*. New York: Oxford University Press.
- 齋藤 憲司(2006). 学生相談の新しいモデル 臨床心理学, 6(2), 162-167.
- 清水 健司・岡村 寿代(2010). 対人恐怖心性-自己愛傾向2次元モデルにおける認知特性の検討——対人恐怖と社会恐怖の異同を通して—— 教育心理学研究, 58, 23-33.
- 清水 健司・川邊 浩史・海塚 敏郎(2008). 対人恐怖心性-自己愛傾向2次元モデルにおける性格特性と精神的健康の関連 パーソナリティ研究, 16, 350-362.
- 高橋 智子(1998). 青年のナルシズムに関する研究——ナルシズムの2つの側面を測定する尺度の作成—— 日本教育心理学会第40回総会発表論文集, 147.
- 谷 冬彦(2004). 新たな自己愛人格尺度の作成(1)——因子構造と対人恐怖的心性との弁別性の確認—— 日本心理学会第68回大会発表論文集, 69.
- 苦米地 憲昭(2006). 大学生——学生相談から見た最近の事情—— 臨床心理学, 6(2), 168-172.
- 鶴田 和美(2010). 学生生活サイクルとターニング・ポイント 鶴田 和美・桐山 雅子・吉田 昇代・若山 隆・杉村 和美・加藤 容子(編) 事例から学ぶ学生相談(pp. 1-11) 北大路書房
- Wink, P. (1991). Two faces of narcissism. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 590-597.
- Wink, P. (1992). Three types of narcissism in women from college to mid-life. *Journal of Personality*, 60 (1), 7-30.
- 吉井健治(2007). 過敏型自己愛人格傾向の青年の事例——自己の傷つきの再体験への恐れ—— カウンセリング研究, 40(4), 306-315.

本研究は, JSPS科研費 研究活動スタート支援 25885042の助成を受けたものである。